大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

担任の主観とQ-U に基づくクラス状態の把握の比較

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金田, 忠裕, 石丸, 裕士, 塚本, 晃久, 中谷, 敬子, 和田, 健, 重井, 宣行, 久野, 章仁, 小幡, 卓司, 稗田, 吉成 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007550

担任の主観と Q-U に基づくクラス状態の把握の比較

金田忠裕[*1]，石丸裕士[*2]，塚本晃久[*3]，中谷敬子 [*1]，和田健[*1]，
重井宣行[*4]，久野章仁[*5]，小幡卓司[*6]，稗田吉成[*7]

Comparison between Q-U Results and Teachers' View for Class Atmosphere

Tadahiro KANEDA[*1], Yuuji ISHIMARU[*2], Akihisa TSUKAMOTO[*3], Keiko NAKATANI[*1],
Takeshi WADA[*1], Nobuyuki SHIGEI [*4], Akihito KUNO[*5] ,
Takuji OBATA[*6] and Yoshimasa HIEDA[*7]

要旨

平成 25 年度に大阪府立大学高専 9 クラスで高校用 Q-U を 2 度実施した．また 3 月に座談会を実施した．Q-U スコア，中でもソーシャルスキル関係スコアが担任の主観と大きく異なる学生の就職活動がスムーズに進んでいないことが判明した．これまでにも他高専の高学年クラス担任からも同様の指摘があったがその現象が複数のクラスで確認された．座談会において，担任から「表面上問題が起こっておらず，イベントも順調に出来ているクラスにおいて，問題を抱えている学生を発見するのに役立った．」，「4 年生の学年末時に，進路が唯一未決定の学生が要支援となっていることに驚いた．」など，Q-U の有効性を認める意見が多く出された．その反面「成績が良いのに，要支援領域にいつもプロットされる学生をどのように理解して良いのか分からない」など，Q-U の解析法をもっと知りたいと思っている担任が多いことが判明した．

キーワード: クラス状態の把握，担任，Q-U，学級満足度，学校生活意欲，ソーシャルスキル

１．はじめに

クラス運営をするために，担任は学生との面談・観察や科目担当教員から情報を聞き出し，個々の学生とクラスの状態を把握していくが，担任の能力に依存してしまうことが多い．

本研究は，客観的に学生の状態を把握することを目的に開発された Q-U(Questionnaire-Utilities)のデータを，大阪府立大学高専（以下，本校）の担任がクラス運営に活用する方法について検討することを目的とする．

2014 年 8 月 18 日 受理

*1 総合工学システム学科　メカトロニクスコース
(Dept. of Technological Systems : Mechatronics Course)
*2 奈良高専(Nara National College of Technology)
*3 機械システムコース (Mechanical Systems Course)
*4 電子情報コース (Electronics and Information Course)
*5 環境物質化学コース(Environmental and Materials Chemistry Course)
*6 都市環境コース(Civil Engineering and Environment Course)
*7 一般科目理系 (Natural Science)

単に Q-U のデータを取るだけではなく，そのデータを解釈して助言ができる教育カウンセラーの資格を持つ教員にコンサルテーションを受けることで，自分のクラス運営を俯瞰的に見て改善できるとともに，他の担任と情報共有できるので学校全体の教育力の向上につながる．Q-U ではソーシャルスキルに関するデータも出るため，進路に悩む多くの上級生に適切な助言を与えることができる．

２．Q-U と各データの解説

Q-U とは，早稲田大学の河村茂雄教授によって開発された心理テストである．これは，学級満足度尺度（**図１**）と学校生活意欲尺度（**図 2**）からなる．これにソーシャルスキル尺度（**図 3**）も加えたものが Hyper Q-U である．詳細は参考文献を参照されたい[1][2][3].

図１に学級満足度プロットの例を示す．右上の満足群にプロットが集まっているクラスでは，自治・主体性が成立している．逆に，左下の不満足群に集まっていれば学級崩壊状態にある．また，左上の侵害行為認知群にいる学生は，いじめにあっているか，非常に敏感か，自己中心的である．右下の非承認群にいる学生は，認められていないと感じて意欲をなくしている． この図から，クラ

ス集団の状態やクラス内での個人の状態がわかる.

次に図 2 に学校生活意欲プロフィールの例を示す. 図 2 の左側では, 学習意欲と進路意識が特に低く, 右側では, 友人との関係とクラスとの関係が特に低い. 学生の悩みは概ね低得点箇所と一致するので, この図から, 個人別の悩みの内容や程度が分かる.

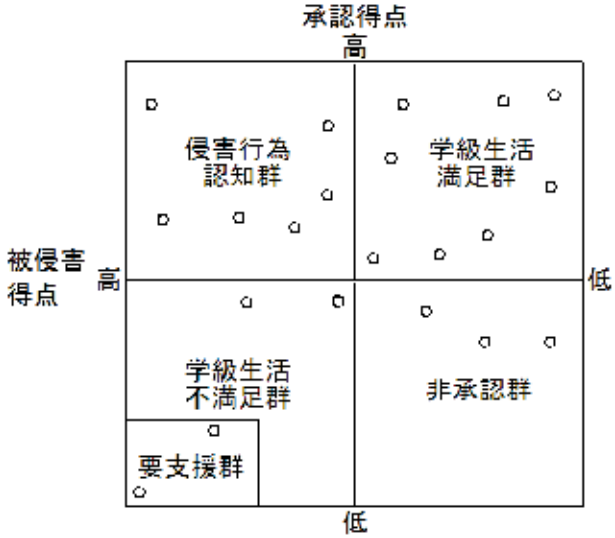

図 1　学級満足度プロットの例

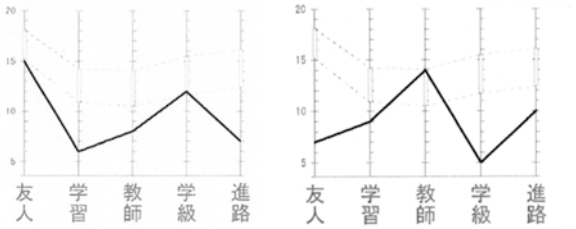

図 2　学校生活意欲プロフィールの例

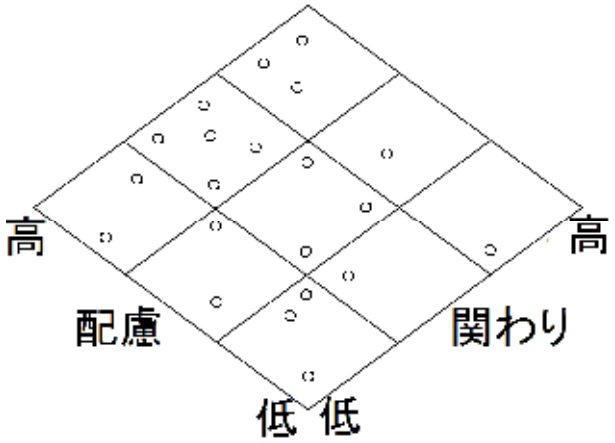

図 3　ソーシャルスキルプロットの例

図 3 にソーシャルスキルプロットの例を示す. 左に行くほどよく配慮でき, 右に行くほど関わるのがうまい. このため, プロットが左に偏っているクラスはおとなしく内向的で, 右に偏っているクラスは活発で社交的である. また, 極端に左に偏っている学生は, 悩みを抱え込みがちであり, 右に偏っている学生は, 空気を読むのが苦手である. この図からクラス集団の雰囲気の起源や個人の社会性が分かる.

3. Q-U データからの解析

研究代表者が, 全クラス担任に声をかけ, Q-U を実施してもらえるかお願いしたところ, 平成 25 年度は 9 クラスで実施することになった. 1 回目の実施時期は 7 月とし, 2 回目の実施は 1～2 月とした. また, 3 月に参加担任による座談会を実施した. なお, 本稿では, 平成 24 年度に 1～2 年生 3 クラスにおいて年 2 回(7 月と 2 月)に実施した Q-U スコアと平成 25 年度 6 月に実施した当該クラス学生の学習習慣に関するアンケート結果との相関についても議論する.

3.1 低学年学生の特徴についての解析

平成 24 年度に 2 年生 2 クラスと 1 年生 1 クラスの担任の協力を仰ぎ, 高校用 Q-U を実施した. そこで, 平成 25 年度には, この Q-U スコアに基づいて, 本校の低学年学生を特徴付けようと試みた. 3 担任にコンサルテーションを実施後, 3 担任が主体となって, 科目担当教員に学生の学習習慣に関するアンケートを実施した.

これらを他高専のスコアと比較した結果, 本校の学生は, 友人との関係や学級との関係のスコアが低く, 被侵害得点が高い傾向にあることが判明した. 特に, 専門コースが決定する 2 年生の学年末に, 被侵害得点が高くなるなど, 学生にはかなりのストレスがかかっていることが判明した. また, 学生の学習習慣に関するアンケート結果より, レポート提出などの学習習慣が身に付いていない学生の学級満足度は低く, 学級満足度は学生の学習習慣に強く影響を及ぼしていることが裏付けられた[1].

一方, 担任が要支援と判断した学生について Q-U スコアを様々な立場の教員と共有した場合には, 当該クラスの被侵害得点が 20 点満点で 4 ポイントも改善できたことがわかった[1]. 平成 25 年度は, 高学年を中心に Q-U を実施したため, 低学年の特徴を複数回検証出来ていない. 担任とのコンサルテーションにおいて, 担任の主観に基づいて Q-U スコアを解釈した結果, 上述の特徴は本校に特有である可能性が高いと判断したが, 当該学年だけに特有の結果かも知れない. これを明らかにするには, 次年度以降も引き続き検証を続ける必要がある.

3.2 高学年に高校用 Q-U を適応することの意義とキャリア教育への活用

平成23年度及び平成24年度，研究代表者が担当する4年生と 5 年生のクラスで，低学年と同様に高校用 Q-U を実施した．平成24年度にコンサルテーションを実施し，担任の主観と Q-U スコアを比べた結果，高学年のクラスにおいても，Q-U に基づいてクラス状態や要支援学生が把握できること，担任の盲点チェックに有益であることが判明していた[2]．Q-U が学生の状態を反映しているのであれば，キャリア教育に活用できないかと考え，平成25 年度にもコンサルテーションを実施し，進路と Q-U スコアとの相関について検証しようと試みた．その結果，Q-U スコア，中でもソーシャルスキル関係スコアが担任の主観と大きく異なる学生の就職活動がスムーズに進んでいないことが判明した[3]．同様の指摘は，これまで他高専の高学年クラス担任からもあった．

3.3 平成 25 年高学年 4 クラスの状況[4]

平成 25 年度 4 年生 4 クラス(1～4 組とする)で，平成25 年 7 月と平成 26 年 2 月に Q-U アンケートを実施した．Q-U データをもとに分析をした結果について考察する．

ソーシャルスキルデータの分布から，クラスの雰囲気は，1 組は活発なクラス，2 組はおとなしいクラス，3 組は少し活発なクラス，4 組はおとなしいクラスと言える．

次に分析を実施したクラスが 5 年生の就職活動において，3 社以上受験したなど苦労した学生についてソーシャルスキルデータから考察した．

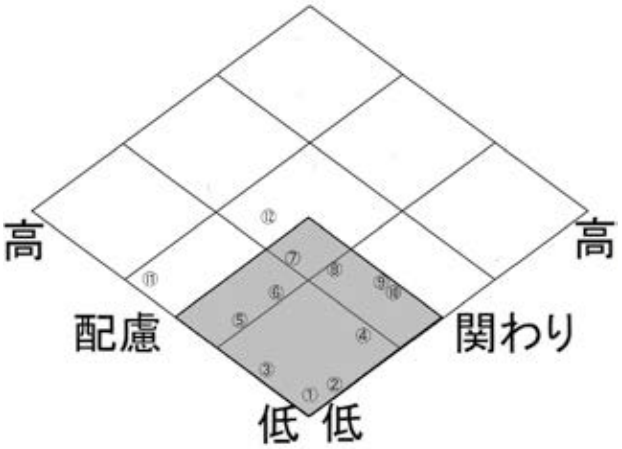

図 4　就職活動で苦労した学生のソーシャルスキルプロット

図 4 ソーシャルスキルプロットに，就職活動で苦労した学生について 4 クラスのデータをまとめた．配慮と関わりの得点の半分より以下のグレー領域に固まっていることがわかる．特に配慮も関わりも低い数値にある 3 人は，**図 1** に示す学級満足度プロットの要支援群あるいはそれに近いところにプロットされている．また彼らの悩みを**図 2** の学校生活意欲プロフィールから見ると進路を含めてすべての項目で低い数値になっていることがわかる．

図 5 に**図 4** の学生の学級満足度プロットを示す．クラス運営には，学級満足度プロットが最重要視されているが，就職で苦労した学生のうち、先に指摘した 3 人しか要支援群にいない上に，他は全ての領域に分かれて存在しており，特徴付けが困難である．よって学級満足度プロットよりもソーシャルスキルプロットの方が進路指導には有効であり，**図 4** のグレーの領域の学生には特に注意をはらう必要があると思われる．

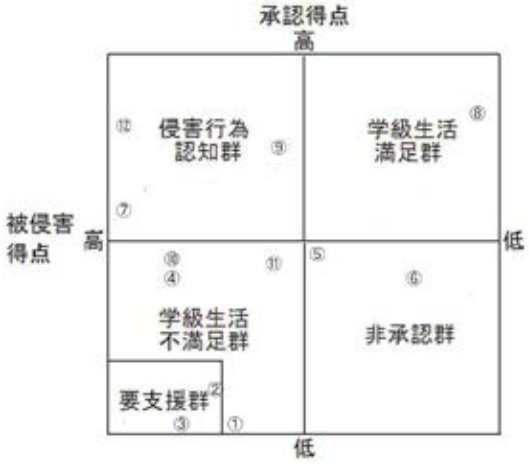

図 5　就職活動で苦労した学生の学級満足度プロット

また，ソーシャルスキルデータが高い学生であったとしても学級満足度プロットにおいて，満足群ではなく，侵害行為認知群の場合は，自分は悪くなく他人に原因を求める自己中心的な学生であると言えるであろう．このような学生のなかには，前述した就職活動で苦労した学生ほどではないが，1 回で合格することがない場合も見受けられた．

以上のように，高専高学年における就職指導において，ソーシャルスキルデータはかなりの割合で利用できることがわかった．特に配慮と関わりの下 4 分の 1 にプロットされる学生については就職活動において苦労する学生がかなりの割合でいると言える．

3.4 座談会における担任の意見

平成 25 年度末に本校にて実施した「Q-U 実施担任による座談会」において，先に指摘したソーシャルスキル関係スコアが担任の主観と大きく異なる学生の就職活動がスムーズに進んでいないことについて，別の高学年クラス担任からも同様の指摘があった．

また，4 年生のクラスに対して高校用 Q-U を適応す

ることによって,「担任が自身のクラス運営が適切かどうかをチェックする手段として役立った」旨の意見が多く出された．よって，4 年生においても，高校用 Q-U を適応することによって，クラス運営に役立つと言えるようである．

高学年においては，ソーシャルスキル関係スコアを中心に，Q-U スコアをそのまま鵜呑みにするのではなく，担任や科目担当教員の主観と比較することによって，キャリア教育に活かせるのではないかという指摘は興味深い．ところが，高学年において，Q-U スコアと教員の主観と就職活動の関係を解明しようとした研究は少ない．仮説を検証し，将来的に Q-U をキャリア教育に役立てるためにも，次年度以降も引き続き研究することが望ましい．

さらに「表面上問題が起こっておらず，高専祭などのイベントも順調に出来ているクラスにおいて，問題を抱えている学生を発見するのに役立った.」,「Q-U スコアにクラスの雰囲気が良く反映されており，対人トラブルを見つける良いきっかけになった.」,「4 年生の学年末時に，進路が唯一未決定の学生が要支援となっていることに驚いた.」など，Q-U の有効性を認める意見が多く出された．

しかし,「クラス替え前後で Q-U スコアをどのように利用して良いのか分からない」,「ソーシャルスキルデータを 3 年生で活用する方法が分からない」,「成績が良いのに，要支援領域にいつもプロットされる学生をどのように理解して良いのか分からない」など，Q-U の解析法をもっと知りたいと思っている担任が多いことが判明した．

座談会参加者の直接の意見ではなかったが,「先入観が入るから見たくない」,「科目担当者会議で互いに意見を交わせば Q-U アンケートは不要である」,「記名式アンケートで何も分からない」という教員も多いようである．それらの意見に対しては,「Q-U アンケートは『正解』ではなく，自分自身と異なる視点を持つ，前担任からの引き継ぎ情報と同様に，取り入れて損はないこと」,「Q-U を採用することによって，担任や科目担当教員の誰も気づくことが出来ない盲点に気づけた事例や，学生間トラブルを大事になる前に未然に防げた事例がいくつもあること」,「Q-U スコアを統計処理した結果，高専生に特有の『3 年生の中だるみ現象』などが捉えられおり，高専生は概ねアンケートに真面目に回答していると判断できること」などを説明した．

肯定派の教員は Q-U をクラス運営に取り入れる有効性を実感しているものの，否定派の教員に対して論理的に説明出来るまでではないようである．全学的に実施するには，ひとりでも多くの教員に理解を深めてもらえるような研修会を開催すると共に，有効な事例研究を今後とも積み重ねなければならない．

4．おわりに

本稿では，客観的に学生の状態を把握することを目的に開発された Q-U のデータを用いて，担任がクラス運営に活用する方法について検討した結果について報告した．以下に成果をまとめる．

1）低学年では，レポート提出などの学習習慣が身に付いていない学生の学級満足度は低く，学級満足度は学生の学習習慣に強く影響を及ぼしている．
2）本校の学生は，友人との関係や学級との関係に関するスコアが低く，被侵害得点が高い傾向にある．
3）専門コースが決定する 2 年生の学年末に，被侵害得点が高くなるなど，学生にはかなりのストレスがかかっている．
4）高学年ではソーシャルスキルデータから，配慮と関わりの下 4 分の 1 にプロットされる学生については就職活動において苦労する学生がかなりの割合でいることがわかった．
5）座談会から Q-U のデータの利用方法について，まだまだ理解していないので，解析方法について理解したいという意見が多いことがわかった．
6）4 年生に「高校用 Q-U」を適応したが，このスコアは，クラスや個人の状態を良く反映していると，参加した 4 年生の全担任が感じており，4 年生にも適応可能であるという意見が多かった．
7）就職に有効利用するには 4 年生までで使用すべきとの意見が，5 年生と 4 年生の担任からも出された．

本研究は2013年度大阪府立大学工業高等専門学校校長奨励研究「担任の主観と Q-U に基づくクラス状態の把握の比較考察」による支援を受けて実施した．

参考文献

[1] 石丸ほか:Q-U から得られた低学年混成学級における特徴とそれに基づく指導，日本高専学会誌, 第19巻3号, pp. 13-18(2014)
[2] 金田ほか:Q-U のコンサルテーションを取り入れた自己省察，日本高専学会第 18 回年会講演会講演論文集, pp. 15-16(2012)
[3] 金田ほか：高専高学年における Q-U に基づく進路指導の自己省察，日本高専学会第19回年会講演会講演論文集，pp. 45-46(2013)